日本歯科医史学会会誌・第5巻
第4号通巻15号・昭和53年3月

ピェール・フォーシャール著「外科歯科医」の著者序文 (2)*

—— 故今田見信先生に捧ぐ ——

大　前　義　文**訳

承　前

私は先ず第一に歯牙の一般的な性質とその成長，構造，位置及び機能を論ずる．次いで小児期に乳歯によって引起される各種疾患について述べた後，それらに対する適当な処置の方法を示し，更にその後の歯の保健の方法と歯を美しく保存して行くために役立つ事柄を述べ，生涯の間に歯牙について起り得るあらゆる疾患について説明することにする．私はこれら各種の疾患を百種以上に分類したが，これは他の著述者達によって書かれた膨大な数量をも遙かに越えるものである．私はこれを三種に区分した．第一は外因によるもの[1]，第二は原因不明のもの[2]，第三は症候的なもの[3]である．最も特異な症例はこの中の第三の分類に入れることにし，最後にそれらに対する予防や治療の方法を詳しく述べる．

歯齲と歯齦と歯牙とが密接な関係にあることは，夫々の疾病が相互に感染の原因になっていることからでも明白である．それが私の歯齦とその疾患を取扱う所以である．

次に各種手術について一通り述べる．抜歯は最も普通に行われる手術であるが，しかしこの手術は通常一般の人々が考えているよりも，遙かに多くの思慮と知識とを必要とするものである．歯の刷掃，鑢がけ，切削，焼灼及び充塡の場合に必要な処置の方法について述べる．歯牙を調整し，排列し又それを喪失した場合は補塡して，しっかりと持たせる方法を取扱う．

場合によっては，歯牙の喪失も止むを得ないこともあるが，しかしそれには技術的に欠損を補充することが可能なのである．特定の歯牙或いは全歯喪失の場合，それに代替するための人工的な部品を私は完成しているし，又考案もした．そしてこれらの部品は自然歯の営む機能のすべてを完全に保持できるよう充分機能を回復するものなのである．これらについては，私自身も興味を持っている事柄なので，できるだけ詳しく解説するつもりである．

口腔の疾患や口腔に派及した疾患が時には歯槽骨及び口蓋弓を形成する骨を破壊する程頑強且つ悪性であることがある．全般的にか，部分的にか，何れにせよ唾液や食物の一部が，正常な器官を通じて嚥下できずに，鼻から逸れたり或いは鼻の分泌液が口の中へ流込むことがある．そんな場合には声も明瞭ではなく，辛うじて呼吸をしているだけという状態なのである．このような苦痛から患者を救い，失われた機能の回復を助けるために，私は五種の器具を考案した．これらに付いては最も詳しく記述する．

又，私は歯牙に使用される各種の器具の使用方法について説明の必要があると考えた．それは器具の或るものについては，私が完成させたのだし，その外にも極めて大きな効果を発揮するに違いないと信ずる機器類を考案しているからである．

---

* Author's Piéface of Pierre Fauchard: "Le Chirurien Dentiste"

** Yoshibumi Omae

1) Les maladies dont les causes sont exterieures external causes (external causes)

2) Les causes sont cachées (occult causes)

3) Les maladies simptomatiques (simptomatic)

本書第一巻の末尾に，類似した症状に対して手術する際の模範にするため，私が手術を行って治癒した極めて異常な疾患の観察72例を提供した．

一般公衆の福祉厚生に役立つこと，これこそ私が本書の編纂を思い立った唯一最大の目的なのであるが，そのような事柄については，いささかの手落ちもないようにするため銅版挿画42枚をつけた．それは自然に萠出した状態の歯牙や，変形した異状な歯，種々の異常に大きく成長した歯，その中には歯石が付着して石が骨になったもの，それらは歯牙や口腔内のどこかから取出したものであるが，それを処置するに必要な器具，歯牙の一部或いは全部を取替える人工的な部品及び私が先程話したばかりの五種の異った閉塞板[4]などである．

最後に，口腔部分のその位置により，どうしても必要な新しい機械や器具，施術の際に患者を置くべき位置及び歯科医が執るべき姿勢の問題を本書で提起した．

更に，私は読者諸氏に次のことをお断りしておく．世の中には歯科技術の中の難かしい処を会得しようという気のない人々や，この小著或いは機械器具の記述など全く読む気のない人々があること，更に本書を批判し得る能力を備えた人々のあることである．何故なら，私が本書で述べることは，そのような人々に取って，余りにも単純な事柄であるか，さもなければ既知のことかの何れかだと思われるからである．しかし，私はあらかじめ彼等には次のように答えるつもりである．私の意図する処は，世の中すべての人々，とりわけ私が専門とする外科の部分[5]を学びたいと願う人々のために著作するものであって，彼等に妨げになるようなものはすべて取り除き，私が最も明白であると共に最も平易であると信じた方法を提供し，それによって一般公衆に大きな満足を得てもらいたいとこう願うものであるからであると。

次に手術はどうすればよいのかを学びたくて本書を読むのではない人々や，歯科診療に従事するつもりのない人々に取っては退屈至極であろうけれど，手引書や器具の解説を中断せずに読み覚えておくならば，有益であると共に楽しい数多くの役立つことを，この書物の以下の処から見出す筈である．そこで，私は一つの物体を二つに分けるように，この書物の後に続く部分を，他の部分とは別に分けて書くことにした．

数多くの経験が一般外科において収集され，種々の成功によって確認された後，多数の学者によって承認されたもの以外は，この書物に採用しなかったので，その初版は早々に出尽してしまったし，又外国語に翻訳する価値があると考えられもしたので，読者はこの第2版を初版と同様の好意と慇懃(いんぎん)さをもって迎えてくれるものと心ひそかに期待する次第である．何故ならこの第2版には珍奇である共に有益な症例を数多く追加したし，又その後の新しい研究も加えたからである．

たとえ私が現著者達の誤謬を明らかにしているとしても，それは別の著者がやっても同じことであって，いずれも真理愛から出たことである．又私が校閲するときに感じた嫌悪感を克服するために払った努力を，良識のある人々は考慮に入れてくれるだろうことや，同じこれらの著者たちが充分理性的で，その諸著作に対して私がおこなった考察を不愉快に思わないで受取ってくれるよう期待する．繰返して言うが，私がそれらの誤謬を明らかにしたのは，私の個人的な栄誉を追うものではなく，広く一般の教育のため以外のものではない．更に言えば誤謬を冒したことは残念なことに相違ないが，若し人が自己の誤謬を自認する力を持つならば，より一層価値あることであると思うのである．　（完）

後　記

本稿はピェール，フォーシャールの著書「外科歯科医」1746年刊第2版の巻頭にある著者序文を全訳したものである．ご承知のように，来年（1978年）はフォーシャール生誕300年に当るし，又彼の「歯科外科医」の出版が1728年であるから丁度250年に当る．

歯科医学の領域に，初めて近代科学の風を当

---

[4] obturateurs (obtulators) 閉塞板または密閉材料．oftulotorの説明については，第2巻第20章～23章の4章を又挿画38～40の3枚を提供している．

[5] 歯科医学の領域．

て，以後急速な進歩発展を促がすきっかけを作り，「歯科医学の父」と仰がれるに至ったフォーシャールに対し，その生誕地や，父母の名，生年月日さえ定かに伝え得なかったことは，我々歯科医療にいささかでも関連のある者にとって誠に申訳なく残念なことと言わねばならない．

このように，彼の生涯を物語る資料の極めて乏しい中にあって，彼自らが書き残してくれた本稿の序文は，その生い立ちを語る唯一のもので，誠に貴重なものである．

しかし乍ら，何分にも今からおよそ250年も昔に書かれたもので，我が国で言えば将軍吉宗の時代に当る．我が国の文書でもその頃の古文書と言えば，そう簡単には読めない．素養のない私如きが難渋するのは，寧ろ当然かも知ないが，本稿の翻訳は途中全くお手上げの形になっていた処，たまたま畏友中央大学教授西海太郎氏（フランス近代史）及び同氏を通じ同大学鈴木康司教授（フランス古典・啓蒙文来）のご教示を受ける幸運に恵まれ．漸く気を取り直し訳了できたのは望外の幸いで，偏えに両教授のお蔭と厚くお礼申し上げる次第である．

なお例によって，大阪大学医学部中川助教授には終始ご教示を賜ったし，又本学会生みの親である今田見信先生には，不断の激励を賜っていたのに，先日（8月18日）急逝され．しかもその数日前に「大変快方に向ったので，今秋の学会には出られるかも知れぬ」など至極元気なお便りをいただいていただけに，一層惜別の情に堪えない．